哲學研究　第百廿八號　第十一卷第十一册

直觀知と物自體（承前）

田邊元

四

カントの批判期に於ける物自體の思想の第一段階といふべきものは、假に知的直觀が可能であると想像した場合にそれの志向的內容として想定せられる物自體を、超越的に主觀と獨立に存在する本體と看て、それが感官を觸發することに由り我々の感性的直觀の志向的內容たる現象が生ずると考へる先驗感覺論の思想であるといふのが、前節の終に於て私の達した解釋である。而して此樣なカントの思想は七十年就職論文の考に影響せられた不整合を含むものであつて、知的直觀の理念の必然性、その綜合的可能性に對する洞察の未だ明ならざりし爲めに、此理念が單にイデ

ーに止まらずイデアールとして、實は我々の現實意識をその內奧に於て規定するものであるといふ如き眞の Idealismus の立場が發揮せられることは出來なかつたのであるといふことを私は述べた。換言すれば物自體を主觀と獨立に存在する超越的本體とする獨斷論的實在論から、之を idealisieren し subjektivieren して、眞實在を Subjekt とする眞の觀念論に進み、感性的直觀の對象たる現象をそれの限定せられた部分と看る立場に移る爲めに必要なる轉回を、知的直觀の理念が成し遂げることが出來なかつたと云つてもよい。併し此轉回を成就する爲めには、知的直觀は直觀的悟性にまで aufheben せられなければならぬとも私は言つた。これは果して如何なることを意味するか。私は先づ此點の說明から論を進めなければならぬ。

前節に述べた所に據れば、知的直觀は感覺の本質體系の限定的結合が叡知的空間を場面として行はれ、結合の中心と周圍との關係の相違に由り分化せられた個別的內容を、恰も無限に多くの中心を有する無限に大なる圓の如く、叡知的空間の全體に亙つて一度に直觀するものであつた。叡知的空間に由つて無限に多くの結合の中心に分化せられたその直觀內容は無限の多樣であつて、その如何なる二つの部分も同一といふことはない。知的直觀の內容は無限に個別的なる多樣の統一である。

啻に全體が創造的綜合の成果として個別的に限定せられたものであるのみならず、その各部分がまた相互に一を以て他に置き換へ難き個別性を有する。縱ひその內容を分析すれば終局には同じ本質要素に歸するも、その結合の中心と周圍との關係の相違に由り無限の個別的內容を分化するのが叡知的空間の本性である。併しながら此樣に知的直觀の內容が無限の個別的多樣であるといふことは、それが何等の普遍者に由つても統一せられざる孤立的內容であるといふことを意味するものではない。否、その內容は無限の多樣でありながら、それが唯一の絕對的なる意志の創造的綜合に由つて可能となり、唯一の叡知的空間の場面に於て個別化せられるといふことにより、その限りの普遍者による統一が全體に貫通しなければならぬ。知的直觀はその可能根據として唯一の絕對自由なる意志的自我を豫想し、その絕對我の自同性に由つて叡知的空間に於ける多樣の分化が統一せられて一つの全體的內容となるのである。それ故知的直觀は必ずその半面に絕對我の自同性の自覺の可能を伴ふ。この可能を現實にした絕對我の自覺が直觀的悟性の發現に至る一步である。直觀的悟性そのものには下に說く如き他の規定が含まれ、寧ろそれに由つて悟性と稱せらるべき所以が現れるのであるから、單に絕對意志の自同の自覺だけでは

未だ直觀的悟性といふことは出來ない。それは單に絕對自覺といふべきものである。併しこの自覺に由つて直觀的悟性のはたらきが始まるのであつて、又直觀的悟性の他の規定、卽ちそれを特に悟性的たらしめる規定も此自覺を豫想し、その基に於てのみ可能なのである。勿論或意味に於ては此樣な絕對自覺は已に知的直觀の根柢にはたらくともいはれる。何となれば知的直觀が叡知的空間に於て個別化せられる無限の多樣を全體一度に直觀することが出來るのは、その創造的綜合をなす絕對意志の唯一性自同性に由るものだからである。併し知的直觀に於ては此唯一性自同性は卽自態にあるのであつて、對自態にあることを必要としない。自覺は對自態に於て始めて成立するものである限り、これと知的直觀とは段階を異にするものと解さなければならぬ。カントは曩に述べた如く知的直觀と直觀的悟性との區別を明に認めないのであるから、況や此處に所謂絕對自覺を知的直觀と區別することなく、前者を直ちに後者に含まれるものとしたのも自然の事である。彼が先驗感覺論に於て已に知的直觀を自覺的のものとし、それの自意識に由つて直觀の多樣が與へられるものと規定し、我々の有限意識に於ける區別に從つていへば內官の方に知的直觀の所在を認めて居るのも是に由るのであらう。併し前節の所論にして誤が

無いならば、『知的』といふ概念の意味する自發性は未だその根柢にある絶對意志の自同性を對自的に自覺しない知的直觀に於て已にその自由創造性に由り成立するものであつて、その限りカントの所謂『それの自意識に由つて』といふ規定はたゞ卽自的に自同的なる絶對意志に由來することを意味すると解する方がより精密であると考へられる。自意識とか自覺とかいふのは卽自に自同的なる意識の對自的立場に於ける發展といふべきものではないか。知的直觀はその根柢に存する絶對意志の自同的一如性を何時でも自覺することが出來る。併し單に知的直觀として直觀內容の內に生きる限り、此自覺が成立するものではない。前者から後者に移るには geistiger Blick の轉向が必要である。意識が低次の立場から高次の立場に進むことを要する。勿論知的直觀の成立する絶對意識に於ては知的直觀が先づあつて、それが自覺の段階に進み、發展して直觀的悟性となるといふ如きことのあるものでないことは言ふまでもない。此等の段階を區別し、其間に發展とか、進行とかいふのは、全く我々の哲學的反省の立場から本質的の關係を言表はすに止まり、絶對意識そのものは最も具體的なるものとして思惟せられ、それに至る低次の段階といふのはたゞその抽象的契機を意味するに過ぎないのである。併しそれにも拘らず此等の段

階を區別し、その特色を精細に考へることは必要なのであつて、斯かる立場からカントの思想を分析批評するのが當面の目的に外ならない。其樣な意味に於て、自覺の段階に入つた知的直觀がカントの先驗感覺論に說く知的直觀に最も多く一致する所があるのであるが、併し彼の要求する知的性質卽ち自發性は未だ自覺せられざる知的直觀に已に具有せられるといはれるのである。さて私は前節に知的直觀に於ては內官と外官との區別が沒せられ、兩者が一に歸することを特色とするものではないかと述べた。此立言はカントの知的直觀を文字通りに解して、先づ自意識の作用的意識があつて、これがその志向的內容を產出することを意味すると看做し、此事が本質上不可能なることから、單に絕對意志の自由生產により直觀內容の產出せられることを知的直觀が意味するに止まると解する場合に、自由なる創造的綜合の作用とその內容との雙關が知的直觀を成立せしむることを言表はすものとして、その正當なることを認められなければなるまい。併し若し內官を以て外官と並立する特殊の感性的機能とせず、一切の意識に通ずる自覺の機能として、高次の作用性を意味するものと解するならば、これと低次の志向的意識としての內容的直觀とは、知的直觀に於ても一に歸することは出來ない。何故ならば、後者は單に志向的內容に於

て生きる立場であり、前者は此內容を作用に屬するものとして、作用そのものに生きる立場だからである。此處に高次の意識としての自覺の特色がある。この自覺せられた知的直觀に於ては、啻にカントが知的性質の規定とした自發性があるのみならず、その自發性自身の意識があり、たゞ直觀內容が志向的に意識せられるだけでなく、それが絕對自由の意志の所產たることが同時に意識せられるのである。其結果內容は意識の對象的契機として自由擴張の活動を限定凝集する靜的方面であるといふ意味を止揚して、自由なる活動の表現手段として全然これに依屬するといふ意味を發揮する。直觀的悟性との區別を明にして居ないカントの知的直觀は想ふに此樣に自覺せられた知的直觀を意味し、啻に自由生產の內容を意識するだけでなく、更にその自由生產性をも自覺した表現的對象の意識であつたのであらう。此の如きものに於ては『それの自意識に由つて』といふ規定が單なる知的直觀の自發性に於てよりも一層充實せる意味を持つことが出來る。其場合に於ては物自體は單に自由生產の直觀內容の全體といふだけの意味に止まらず、その自由生產たることの自覺から絕對意志の表現たる意味を有するものとなる。併しそれは單に先驗感覺論に於て感性直觀に對比して想定せられるに止まる所の知的直觀の內容たること

は出來ぬ。必然先驗分析論に入り、先驗演繹論の自覺の統一に關聯して思惟せられるものでなければならぬ。此樣な物自體の表現性、その根柢となる自由生產の自覺は殊に第三批判に至るまでのカントの形而上的思想を解釋するに必要なる制約であるけれども、それは直觀的悟性と區別せられ、未だ自覺に達せざるものとしての先驗感覺論の知的直觀が直ちに含意することの出來るものではない。我々は單なる知的直觀より一段具體的となつたそれの自覺に於て始めて之を考へることが出來るのである。

右の如く自覺せられた知的直觀は內容の創造的綜合をなす絕對意志の我の中心に於て直觀作用を自覺し、それに由つて直觀內容を意志の表現たらしめる立場であるが、併しこれは直觀內容を論理的たらしめるものではない。確に我々は自覺を我の概念に結び付けて言表はす。意識作用の全體が我の中心に統一せられることを反省して自覺が成立するのであるから、此作用的側面に於ける統一が志向的內容の無限の多樣にもその全體を通ずる普遍性の內在を伴ふことは明である。所謂『我思ふ』の規定が凡ての我が表象に伴ひ得なければならぬといふ如く、この自覺の可能といふ自同的普遍性が知的直觀內容の多樣の全體を貫通するのでなければなら

ぬ。併しこれは直ちに直觀內容を論理的たらしめるものではない。何となれば此普遍性はたゞ直觀內容を意識されたものといふ Modus に於て觀ることを可能ならしめるだけで、何等特殊の直覺に基けられた新なる論理的志向に入らしめるといふことは無いからである。我々は特に論理的な內容でも非論理的な內容でも、內容の區別に拘らず、それが意識されたものである限り一般に此普遍的な視點に於て觀ることが出來るのであつて、此普遍性を論理性とするならば、非論理的に對する論理的といふ區別は失はれ、論理的といふことの意味そのものが消滅しなければならぬ。而して假に此普遍を概念化しやうとしても、その自覺とか自我とかいふ契機は本來對象に屬するものでなく、作用に屬するものであつて、完全に對象化し得ざることをそれの特色とするものであるから、論理の本質に屬する概念的對象なるものが此場合には成立することが出來ない。所詮この知的直觀の單なる自覺だけでは論理的といふことは成立しない。これ上に私が知的直觀の自覺を直ちに直觀的悟性と看做さず、その豫想であり根柢であるけれども、未だ悟性的といはるべき性質を欠くと解した所以である。論理性卽ち悟性的性質は單なる作用の自覺に於てでなく知的直觀の內容そのものの側に於て求められなければならぬ。

それでは知的直觀の內容に於ける論理性の根據は何處にあるであらうか。之を與へるものは叡知的空間を措いて外にはない。叡知的空間は本質體系の限定的結合により現實の內容が產出せられる場合に、その結合關係の相違に由つて、內容の分化を可能にし、而して斯く分化せられた內容の多樣を全體として一如の知的直觀に統一するものである。其故知的直觀の內容は無限の多樣に分化せられつゝ、而も同じ體系を要素とするものとして、そこに無限なる特殊普遍の段階を形造るであらう。如何なる部分も終局の要素に於ては凡て同じであつて、綜合せられた內容に於ては創造的綜合の仕方の個別的なるによつて個別性がある。此同一と個別とを兩極端として無限の類似と相違との段階が成立する。ライプニッツのモナドが同じ宇宙を表現しながらその視點に由つて凡て區別せられて居る如きである。論理の豫想としての、特殊に於ける普遍の內在も此處に成立するのである。知的直觀の內容は唯一同一のものであるが、之を種々の視點から觀るならば、凡て個別的であつて、而もその特殊を通じて無限の段階に於て類似を現し、普遍を內在せしめる。勿論絕對意識に於ては個別的に特殊なるものから、それの相互の比較概括に由つて普遍を發見するといふ如きことはない。かゝる分析的普遍は有限意識に特有なるものである。

左樣でなくして普遍が段階的に特殊に內在して、後者に段階的の統一を與へて居るのを全體に亙つて直覺するのが絕對意識である。此直覺をなすのが知的直觀と區別せられた直觀的悟性である。後者は勿論その契機として前者を豫想する。從つて絕對意識を直觀的悟性として言表はす時は、必然にその契機として知的直觀を內含するのであるが、併し知的直觀は直ちに直觀的悟性たることを內含するものではない。縱ひ前述の自覺せられた知的直觀を考ふるも、猶論理的といふべき理由なく、直觀的悟性たる性質を有するものでない。勿論知的直觀が前節に述べたやうな本質的構造を有するものとしてでなければ成立することが出來ないとするならば、それは必然にその內容の側に於ける對自的發展の段階として直觀的悟性を卽自的に含むともいはれるであらう。其限り兩者を同一視し、絕對意識を或は知的直觀と規定し、或は直觀的悟性と規定するのも正當であると考へられる。併しそれにも拘らず兩概念は同一內容を有するものではないのであつて、本質上區別せらるべきものである。知的直觀の內容としての物自體は直觀的悟性の內容としての物自體とは區別せられなければならぬ。前者は單に自發的自由生產の內容であるが、後者は之を質料としそれに於てロゴスの自覺せられたものである。併し此處に所謂ロゴス

の自覺とはヘーゲルの汎論理主義に於ける如く、個別的なる知的直觀の內容がそのWasに關して普遍者から必然に發出せられたものとして規定せられることを意味するのではない。たゞ個別的なる內容に於て普遍が內在し、前者の凡てが順次に普遍者に統一せられること(Dass)が直覺せられて居るのを謂ふに止まる。特殊の內容は本來超論理的な絕對意志の自由生產に由來するのであるから、之を所謂汎論理主義的發出論理に由つて合理化することは出來ない。たゞ斯くして產出せられた內容が絕對意識の本質上普遍を段階的に內在せしめ、これに由つて統一せられることを直覺するのが直觀的悟性に於けるロゴスの自覺である。その時直觀的悟性の直覺に屬する普遍が有限意識の比量的悟性に於ける分析的普遍と異り、後者の如く特殊から比較概括せられたものでなくして、全體の直觀から特殊に下る綜合的普遍であるといふことは、必ずしも發出論理を其前提として要求するものではない。固より發出論理の普遍が綜合的普遍となることは疑無い。併し逆に綜合的普遍は必ず發出論理を要求するとは考へられない。何となれば假令發出論理に從つて特殊が普遍から論理的に誘導せられなくとも、我々は猶意志の立場に於て、特殊の全體を統一的に直觀する意志の內面的目的として普遍を考へることが出來るからである。

たゞ此場合に於てはその普遍を概念化して意志の活動を規定するものたらしめることは出來ない。何故ならば、斯樣に概念化せられた目的觀念を以て意志活動を規定することは、意志を意志以外の規制の下に置くことであつて、他律に外ならず、絕對自由の意志に矛盾することになるからである。縱形式的には理性の法則を自律の立場に於て容るゝとするも、內容的な目的觀念を以て意志を律することは意志の自由を否定することに外ならない。理性は意志の契機とはなつても、逆に前者が後者を自己に從屬せしめることは出來ぬ。意志の內面的目的は理性に由つて論理的に概念化する能はざる內容を有する。其意味に於てそれは非合理的である。併し非合理的なるものも絕對意志の立場に於ては自由の必然性をもつ。卽ちそれは超論理的の內面的必然性を有するのである。其故之を論理の立場から合理化しやうとする場合には、己に產出せられた特殊の全體に於て普遍の內在を直覺する外に途が無い。これは發出論理に於ける如く論理の必然に由つて特殊を導く普遍ではないが、分析的普遍に於ける如く抽象的なるものでもなく、全體の直觀に於て特殊が超論理的な必然性をもつことを目的論的に含蓄する普遍である。こゝに分析的普遍と發出論理の綜合的普遍との間に立つものとして、猶一種目的論的の綜合的普遍を考

へることが出來る。カントの說いた綜合的普遍は此の如きものであつたでもあらう(Kant. Kr. d. Urteilskraft. §77參照)。私が曩に直觀的悟性に於けるロゴスの反省と言つたのは、此意味に於ける普遍の特殊に於ける統一的內在の直覺に外ならない。ロゴスは實在の窮極の根柢でなく、斯かるものとしての絕對意志の反省の一面であり、その契機である。こゝに直觀的悟性をヘーゲルの絕對から區別する點がある。

右の如き直觀的悟性はカントが Spezifikation der Natur の問題を說く場合に、自然が個別的なる現象から特殊の法則を通じて漸次に普遍化せられ、終に絕對普遍の法則に由つて統一せらるゝ體系を形造る、その豫想として、この偶然性を必然化する根柢となることが出來るのは明であるが、更に斯かる法則的認識の可能の要請に根據を與へるばかりでなく、一步遡つて現象の可認識性一般に對しても根據を與へるものである。我々は假令個々の感性的直觀を有するも、それが範疇に由る悟性的認識に於て經驗となることが出來ないやうな絕對に不規則亂雜なものであると想像することは何等の矛盾をも惹起するものではない。經驗に於ける現象の可認識性は論理の必然に由るものでなく偶然である。カントは之を intelligible Zufälligkeit と稱した。(Kr. d. r. V. B. 486. 拙著『カントの目的論』四參照)。この本體的偶然性もまた直觀的

悟性に由つて必然化の根據を發見することが出來る。何となれば若し我々の感性的直觀が知的直觀の制限せられたものであつて、其根柢は後者に存するとするならば、前者が比量的悟性によつて概念的に客觀化せらるべき普遍を內在せしめることは、後者の直觀的悟性に於てロゴスの立場から自覺せられることに根據を有すると解せられるからである。自然特殊化の偶然性も經驗可能の偶然性も共に直觀的悟性に由つて必然に化せられる。兩者の相違はもとの知的直觀に於て內容の質に關係なく、たゞそれが叡知的空間の中心周圍の普遍なる關係が無限に多くの中心に就いて成立する、その特殊に於ける普遍の內在が經驗の概念的成立一般を根據附けるものであり、これに對し此叡知的空間そのものに屬する特殊普遍の相卽を豫想した上で、更に直觀內容が本來同じ本質體系の相異る仕方に於ける結合として分化の方向と統一の方向とを有すること、卽ち內容上特殊分化の內に統一普遍の存することが、法則的自然の可能を根據附けるといふ點にあるのであらう。我々は一方を形式上の特殊に於ける普遍の內在と呼び、他方を內容上の特殊に於ける普遍の內在と稱することも出來やう。後者が前者を豫想して成立することは勿論であつて、直觀的悟性の論理性一般が前者に關するのは明である。自然特殊化に關聯して直觀的悟

性の理念を考へることは尙後の問題に屬する。今先づ私は論理性一般の立場から直觀的悟性を、もう少しく精しく考へて見なければならぬ。

知的直觀の內容をその質に拘りなく、一般に同じ本質がその結合せられる仕方の相違に由つて個別的に分化せられつゝ、その結合の中心周圍の關係は何れの結合中心に就いても共通なるに由り、形式上普遍が特殊に內在するといふ方面から觀て、此特殊普遍の相卽を直覺するのが今考へやうとする直觀的悟性の特色である。これは喩を以て說明するならば唯一自同なる幾何學的空間に於て、その如何なる點も全然個別的なるものであると同時に、如何なる點を原點としても一般に座標が想定せられ、普遍の空間關係が成立すると考へ得るのに比することが出來やう。唯一にして同一なる Raum の個別的なる各點に於て、一般に共通なる Räumlichkeit が成立する關係が叡知的空間にも或意味に於て備はるのである。此處に知的直觀の形式上の特殊に於ける普遍の內在が成立つ。これは幾何學的空間の喩に由つても推定せられる如く、個別と同一との兩極端に於ける特殊と普遍との相卽であつて、その間に普遍性(或は他方からいへば特殊性)の段階を容れることはない。從つて前に述べた特殊普遍の無限の段階は質的見地に由來するものでなければならぬ。而もその段階

は質的親近を可能ならしめる爲めに、各の中心に於ける關係の形式上の同一を要求するものとして、今考へる形式上の特殊に於ける普遍の內在を豫想するものなることは明である。とにかく今考へる形式上の普遍は、個別的なる特殊に內在するかしないかの何れかであつて、程度を容れるものでない。換言すれば知的直觀は論理的として直觀的悟性に發展するものであるか、或は左樣でないかの二つに一つであつて、論理性の程度の相違といふ如きことは無意味に屬するのである。而して知的直觀が前節に考へた如きものである限りは、それは必然に論理的とならざるを得ないのであつて、直觀的悟性はその必然的なる發展と認められなければならぬ。知的直觀は叡知的空間に於ける絕對意志の綜合に由つて成立するものとして、その內容は叡知的空間の本性に由來する形式上の特殊に於ける普遍の內在を具有する。この關係の對自態に於ける直覺が直觀的悟性の本質を形造るのである。此場合特殊は知的直觀の制約たる叡知的空間の個別的なる各中心であつて、普遍は中心周圍の關係一般に外ならないことは今述べた通りである。而して此普遍なる關係は已に前節に說いた如く、絕對意志の綜合に對する制約として存するものでなく、絕對意志に依屬し、その綜合に於ける場面としての叡知的空間に於てのみ現れるものである。

其故若しこれが論理性の根據であるといふことが正しいならば、ロゴスは絶對意志の抽象的一面であつて、後者の自己規定が反省せられ、その絶對的限定が否定せられて、無限定の立場から自己の自由が自覺せられるとき發現するものであるといはれるであらう。論理は絶對意識がたゞその自由なる作用に於て自我の統一を自覺するとき發現するものでなく、その對象的側面に於て自己の自由を自覺するとき始めて現れるものである。此處に前者に相當する前述の自覺せられた知的直觀の立場と、後者に相當する當面の直觀的悟性の立場との相違がある。直觀的悟性は知的直觀の單なる自覺でなく、叡知的空間の對象的側面に於ける具體的なる自覺である。單なる自發性のみならず、それの對象的側面に於ける自覺が完成するのは此立場に於てである。カントが『それの自意識に由つて直觀の多樣が與へられる』と規定した知的直觀は實は此立場までも含むものであらう。併しそれが單に感性的直觀と區別せられた自發的直觀としての先驗感覺論の知的直觀ではあり得ないことも明である。とにかく直觀的悟性に於て顯現せられる內容の論理性は叡知的空間の本性に由來するものであつて、それに於ける個別と同一との相卽が卽ち特殊に於ける普遍の內在としての論理性を根據附けるのである。直觀的悟性はこの相卽內在

の直覺をなすものに外ならない。其故その論理は明に形式論理である。已に第二節に論じた如く時間を超えた絶對意識には圖式化せられることをそれの本質とする先驗論理の範疇が所屬することは出來ない。絶對意識の論理は形式論理の外にはない。その範疇が如何なるものであるか、普通に形式論理の範疇と認められて居る所謂反省的範疇の中で、眞に形式論理の對象構成の形式と認められ、フッサールの所謂形式的對象的範疇 (Husserl, Ideen z. e. r. Phänomenologie u. phän. Phil. § 10) となるものが何であるかは形式的存在論 formale Ontologie に於て精細に研究せられなければならぬ問題であらうが、とにかく特殊に於ける普遍の內在といふことがその全體に通ずる基礎たることは疑はれないやうに思ふ。普通に形式論理の原則と認められる自同律、矛盾律、理由律の三つがこれに基くのもその爲めであつて、特殊に於ける普遍の分化、普遍に於ける特殊の統一は啻に自同區別を可能にするのみならず、純粹に論理的な意味に於ける理由と歸結との關係をも與へることは明である。叡知的空間はその本性上特殊に於ける普遍の內在といふ關係を含蓄するのであつて、之を顯現するとき形式論理の對象界となる。これに於て始めて卽自に個別的なる直觀內容が自同的普遍者の分化としての特殊といふ意味を顯現し、相互に區別せられる

ことが出來る。而してその普遍が統一的なる叡知的空間の內包的全體に相當する外延的全體に一致するが故に、その概念は啻に普遍 universale たるのみならず、同時に全體 universitas を意味するものとなる。叡知的空間は形式論理の領域に對象化せられるのである。この領域が形式上から觀た直觀的悟性の對象界に外ならない。

併しながら曩に述べた如く直觀的悟性は絕對意志の否定的方面であつて、全くこれに從屬するものである。而して叡知的空間も絕對意志の制約としてこれに先だつものでなく、却てそれに從屬するものであつた。其故叡知的空間を對象化する形式論理的領域も絕對意志の自同性を豫想して始めて可能となるものであつて、逆に前者の自同普遍の原理が意志の自同を可能にするのではない。論理の自同が意志の自同の上に立つのである。前者は後者の反省的方面に外ならない。絕對意志の自同的一如性に由つて成立する意識の自己同一が叡知的空間の對象的側面に於て自覺せられたものが論理の自同となるのである。論理の範疇は意識の自己同一の對象的自覺の形式であると云つてもよい。其故直觀的悟性の對象(その意味に於ける物自體)は必然前述の自覺せられた知的直觀をその契機として含み、後者に於ける如くそれが絕對意志の表現といふ意味を有しなければならぬ。この表現性は單な

る知的直觀の對象(その意味に於ける物自體)の有する能はざる所である。直觀的悟性の對象の形式論理性は斯かる表現的對象に於ける絶對意志の反省に成立するのである。それでは此絶對意志の反省に於てその自同的一如性に由來する意識の自己同一は完全に論理化せられ、論理の形式に於て對象化し盡されるであらうか。否、左樣に考へることは出來ぬ。何となれば若し完全に論理的對象化せられるものならば意志は論理そのものに歸して意志の意志たる特色を失はなければならぬからである。絶對意識の內面的形式とも考へられる叡知的空間が論理の形式に對象化せられる爲めには、第一に前述の如く意志の絶對自由なる自己規定に由る絶對の限定が自由に否定せられて無限定の立場に移ることを要する。如何に直觀的悟性の對象界としての形式論理的領域が叡知的空間の唯一性に對應して唯一なるも、前者は何處までも靜的反省の立場に屬する本質の世界であつて、後者の動的な生ける絶對事實の世界とは異る。一は原型であつて、他はそれの模像であるといふ性質を脫することが出來ない。模像に於ては原型に特有な創造的生命といふものは失はれて居る。意志と論理とは此區別を沒することがない。但し意志が何故に論理の立場に移るかは、全く意志そのものの自由なる自己否定に屬するのであるから、これに

論理的の理由を求めることは出來ない。意志は自己自身の絶對的なる自由により論理を實現するのである。後者は何處までも前者に從屬しなければならぬ。次に第二には論理そのものの內實をなす特殊と普遍との關係が超論理的なる意志的體驗に由つて內から直觀せられる外なく、論理は畢竟生ける體驗に由つて內實の充たさるべき Rahmen であるといふ性質を窮極に於て脫することが出來ないのである。勿論數學の函數概念に於て見る如く、純粹論理の立場に於ても、普遍概念がその外延に屬する特殊を發展する法則そのものを內包とし、是に由つて同時に特殊の全體を統一する體系概念となることはある。併しこれは、より基礎的なる特殊普遍の關係を豫想する高次の立場に限るのであつて、その場合にも豫想となる最も根本的なる特殊普遍の關係はたゞ體驗に由つて內實を充たすべき空虛の形式となるのである。今直觀的悟性の對象界たる叡知的空間の對象化せられたものに於ては、普遍的全體と個別的特殊との關係がたゞ絕對意志の自由創造に由つて與へられるのであつて、この關係そのものを更に論理化し得る如きものではない。若しその關係が猶論理的であるならば意志が論理の制約の下に立つことになり、從つて絕對意志が超論理的な自由生產の力であつて、叡知的空間はたゞこれに從屬して現れるものであると

いふ規定に矛盾することとなる。此の如きは我々の排斥する汎論理主義の立場に於てのみ主張せられることであつて、而も此立場に於てさへ最原始的なる範疇の意味内容と相互關係とは體驗の象徴に止まる外なきことは疑はれないと思ふ。叡知的空間に特有なる普遍的全體と個別的特殊との關係、或は前者に於ける後者の相互關係はたゞ絶對意志の體驗に於て直覺せられる外ないものである。この後の特殊相互の關係を前に述べた如く中心と周圍との關係といふ如き言葉に由つて言表はすとしても、それが幾何學的空間の比喩を借用したものに過ぎないばかりでなく、幾何學的空間そのものに於ける點の相互關係やそれの全體に對する關係そのものが論理的には規定し盡す能はざるもの、たゞ體驗に由つて直覺せられる外なきものなることは明である。斯くて形式論理の特殊普遍の關係は叡知的空間を對象化するといふも、それは空虛な關係形式の框を作るだけで、その内實は全然絶對意志の體驗に由る充實に俟つものなること否定出來ないであらう。直觀的悟性の對象界に於ては、形式上如何なる部分も個別的特殊であつて而も普遍の全體に統一せられて居るが、その部分と全體、特殊と普遍との相互關係は全然超論理的なる意志の絶對作用に依存し、たゞ純粹に作用して直覺する外なきものに屬する。之を然らずと看るの

は汎論理主義の獨斷越權であつて、我々は此處にロゴスの制限を承認しなければならぬ。

今述べた叙知的空間に於ける本質體系の結合の仕方が論理を超越するものであるといふことは、直觀內容の質の如何に拘らず、この內容を對象化する場合に常に對象化し盡す能はざる何物かを殘すといふ結果を將來する。而もその對象化する能はざる何物かこそ直觀內容をして直觀內容たらしむるものであるから、直觀は論理の透徹する能はざるものに由つて成立するといはなければならぬ。勿論直觀の質的內容の窮極要素が論理の透徹する能はざるものたることは論を俟たないが、之を離れて直觀の仕方そのもの卽ち形式に關しても、窮極に於ては論理の透徹する能はざる何物かがあつて、此超論理的或物が直觀を成立しむるのであることを認めなければならぬ。現象學の立場から意識の對象的側面たるノエマを分析するとき、意味の層を如何に穿ち行くも、所謂 das bestimmbare X im noematischen Sinne (Husserl, Ideen, § 13 ニ)として意味に歸することの出來ぬ對象を殘すのも是に由るのであらう。論理の立場に於て對象化することが出來ず、無限に對象化を求めて已まないものが此意味と區別せられた對象Xといふものに外なるまい。直觀的悟性の立場も若したゞ論

理の特殊普遍の相卽を直覺するのみに止まるならば此樣に論理を超越する對象Xを殘す外ない。これは論理の立場から對象化することの出來ぬ絕對我と雙關々係に立つものであつて、後者が絕對意志の自同的中心たるに對し、前者はそれの對象的側面に於ける雙關者たる叡知的空間の超論理的統一に對應するものである。後に說く如くカントが理性批判第一版の先驗演繹論に於て純粹統覺に對應して考へた超越的對象Xの如きも、或は此立場からその由來を解釋することが出來るかも知れない。とにかく、知的直觀の內容の綜合統一そのものは論理の立場から對象化する能はざるものであつて、直觀的悟性が若し單に論理的關係の直覺を特色とするものに止まるならば、これは直觀的悟性に對しその悟性的機能の透徹する能はざるものたること恰も感覺的質的內容と同じく、縱後者の如く內容的にではないとしても猶形式的に直觀する外ないものとなるであらう。併しながら上に述べた如く、直觀的悟性はたゞ論理的關係を直覺することのみにその特色を有するものではない。否、その論理的關係の直覺そのものが叡知的空間に關する形式的のものである爲めに、論理の直覺といふも、それは絕對意志の純粹作用的な自覺が對象的側面に卽して行はれるものに外ならない。後者を離れて前者は成立しない。それ故內容に卽した

論理の直覺に於けると異り、前述の如く論理の關係そのものが意志の體驗に由つて內實的に充たされる外なきものであつて、その關係の直覺は作用と獨立な對象に關するものでなく、作用そのものの自己表現に關するといふ意味を有する。卽ち絕對意志の表現としての對象に關するものであつて、論理は意志の從屬たる意味がその直覺自身に含まれて居る。これは前に述べた如く自覺せられた知的直觀の具體的發展として直觀的悟性が考へられ、後者に於ては對象的側面を通しての意志の自覺が含まれるといふことから當然推定せらるべきことであつて、直觀的悟性の對象の論理性は表現的對象に就いてのみ成立するのである。此立場に於ては前述の對象Xは消滅して、全體が絕對意志の自己表現となる。アリストテレスが判斷の主部となつて述部となることなきものを實體と考へた思想が、絕對意志を實在の根柢とする思想と結び付けられるのも此立場に於てであらう。此處に至つて『それの自意識に由つて同時に直觀の多樣が與へられ、それの表象に由つて同時に此表象の對象が存在する』(B. 138-139) といふカントの與へた直觀的悟性の規定も、その可能なる限りの意味を完成すると考へられる。知的直觀が單なる自發性を特色とし、單に絕對意志の自由なる創造的綜合の成果の直觀たるに對し、直觀的悟性はその直觀內容

の形式たる叡知的空間に於て絶對意志の自覺が行はれ、これに由つて特殊に於ける普遍の内在としての論理性が表現的對象の形式に於て反省的に直覺せられることを特色とする。その意味に於て初め私が直觀的悟性を知的直觀の卽自態から對自態へ止揚せられたものであると云つた主張が理解せられなければならぬ。而して此發展を完成するものは絶對意志そのものに外ならない。

以上私は知的直觀と區別せられた直觀的悟性の特色をその一般的輪廓に於て多少明にすることが出來たと思ふ。カントの先驗感覺論に於ては、受容的なる感性的直觀と對比して自發性を特色とする知的直觀が說かれて居るのであるが、先驗分析論に於て現れる直觀的悟性は(假令カントに於ては知的直觀の名を以て呼ばれる場合にも)右に述べた直觀的悟性の性質を有するものであらう。私は前者を後者の立場から大體解釋することが出來はしないかと思ふ。次に之を試みやうとするのであるが、それには今まで全くそれ自身の立場から規定した直觀的悟性を、我々の比量的悟性との比較、それに對する相互關係に於て考へる必要がある。これに由つて種々の場合にカントが提出して居る直觀的悟性の理念の異同と相互關係とをも追跡することが出來るでもあらうか。(未完)